

ドキッとしない世の中で

蔡一恵

我が家のトイレにはいくつかの新聞記事が貼られてある。忘れないためだ。

例えば「原発再稼働を問う」(2014)、「川柳で詠む原発事故」(2016)等。

私の目に一番よく入る位置にあるのは、「黒人差別を考える」(2020)である。横に赤い線が引かれ、「1619年初めて黒人がバージニアに連れてこられる」から始まって2020年まで。主に黒人の活躍と自警団含む警官による暴行、死亡例が記されている。

2012年、パーカーのフードをかぶっていたとの理由で怪しまれ、トレイボン・マーティン(17歳)が自警団の男性に射殺される。2014年、12歳のタミル・ライスがおもちゃの銃を持っているところ射殺される。2016年、フィランド・カスティールが車のテールランプの故障で呼び止められ射殺される。2020年、ジョージ・フロイドが首を地面に押し付けられ窒息死。考えられないが、アメリカにおいてこのような事件は多数あるという。話しは飛ぶが、私は在日朝鮮人の三世で日本に生まれ育ち、差別慣れ人生を送っている。だから在日として色んな差別を受けながら「はいはいまたですか」という思いと、「それはいけません!」という少しの小さな闘志を持って生活している。そして相変わらず守られた環境で楽しく暮らしている。

でもたまに、ドキッとする時がある。

ここ数年でいくと、京都アニメーション放火事件、安倍晋三銃撃事件。

(犯人、在日じゃないだろうな〜)という不安がよぎる。この思いはきっと私だけではあるまい…。何か大きな事件が起きると私は(犯人、在日ではありませんように…)と祈るのだ。

差別の対象として生きにくさを強いられる人々が、恨みや復讐で犯罪をすることは勿論よくないが、有り得ることだから「犯人」扱いされる人が在日であってもおかしくないと思う。ただ、「犯人」でないのにデマや流言によって「犯人」扱いされてしまうのが恐ろしい。新聞記事の黒人たち。パーカーのフードをかぶっていたこと、おもちゃの銃をもっていたことだけで「犯人」扱いされ命が奪われた。現代の話である。

2023年は関東大震災100年ということで当時のことが色々大きく取り上げられた。

デマや流言によって6,000人とも言われる罪なき我が先祖たちが殺された。多くの殺人鬼となってしまった人々が罪なき人々を殴り蹴り、竹やり、鳶口、日本刀で痛めつけそして命を奪った。

著書『飴売り具學永〜関東大震災で虐殺された一朝鮮人青年の物語〜』(文;キムジョンズ/絵;ハンジョン/展望社)にはこう書かれてある。

「ク・ハギョンの体には六二カ所の刺し傷が残っていて、まさにむごたらしく虐殺されたのだ」。

我が家のトイレに関東大震災の記事はない。でも、忘れない。在日朝鮮・韓国人の苦しみの歴史を。ドキッとしない世の中で暮らせる社会にしたい。そして、立場かわれば…で、デマや流言に翻弄されない自分を確立していきたい。